

覚せい剤は怖い！

埼玉県立大学大学院 教授 岡本順子

つい先日のこと、清純タレントとして人気を集めていた芸能人が覚せい剤取締法違反(所持)の疑いで逮捕され、マスコミを賑わす事件となりました。この覚せい剤について、あらためて考えてみましょう。

覚せい剤を含め、シンナー、大麻、麻薬といった、いわゆる薬物乱用に対して、怖いもの、身体に害を与えるもの、といった認識は持っている一方、他人に迷惑をかけないので使うのは個人の自由、1回くらいは使っても平気、よい気持ちになれる、悩みを忘れる、ダイエットや眠気覚まし、ファッション感覚といった軽い気持ちで覚せい剤を使用する若者が多く、認識不足も甚だしいとしか言いようがありません。

1回使えば何度でも繰り返して使いたくなる、それによって薬が効かなくなり耐性が出現する、薬の量が増えていく、薬なしでは生きていけなくなる、薬の奴隷となってしまう、心も体もボロボロになってしまう、これが薬物依存症です。そして、気づいた時はすでに遅し！ 薬を止めた後に発現する禁断症状やフラッシュバック（再燃現象）に悩まされることにもなります。非常に恐ろしい薬であり、毒なのです。

[表1](#)に依存薬物の種類と特徴を示しています¹⁾。覚せい剤に特徴的な逆耐性、これは薬を止めた後に再使用すると、ごく僅かな量でも精神症状が発現してくるものです。覚せい剤の代表はアンフェタミンとメタンフェタミンですが、特にメタンフェタミンは俗名ヒロポンとして、第二次大戦中から戦後にかけて、軍事産業奨励や敗戦後の国民気風活性化の目的で政府が推奨したこともあり、大流行した結果、昭和28年には5万人以上まで中毒患者が増えました（第一次乱用期）。

それ以降、製造と販売の中止によって鎮静化しましたが、昭和52年頃から、暴力団の資金源となり、密売組織の増加や携帯電話、インターネットなどの通信技術の発達により、再び違反検挙者が増え続け、昭和57年には「覚せい剤やめますか？人間やめますか？」のキャッチフレーズで覚せい剤撲滅キャンペーンまで展開されました（第二次乱用期）。

そして現在は第三次乱用期ですが、検挙者の低年齢層下が特徴となっており、平成20年では覚せい剤事犯で検挙された青少年は2,758人、全検挙者の25%も占めています²⁾。

覚せい剤にはヒロポンのほかに、シャブ、スピード、エス、クール、アイス、クリスタル、アップーズ、ブラック、ビュテイズといった若者を引きつけるような名前がつけら

れ、これに加えて最近では、合法ドラッグや脱法ドラッグと称した錠剤型の MDMA（メチレンジオキシメタンフェタミン）がエクスタシー、アダム、バイオ、ビエッテイ、レキシントン、クイーンなどの俗称で売られています。しかし、これらは麻薬取締法によって規制されている合成麻薬ですので、決して合法ドラッグではなく、違法ドラッグなのです。

たとえ、心地よさや陶酔感が得られたとしても、一時的なもので、薬効が切れると、記憶も失われ、自分が何をしていたかもわからず、幻覚作用も出てきます。また、乱用を続けると、不安感や不眠、精神錯乱状態、記憶障害が現れ、時にはショック症状で死ぬことさえあります（[表2](#)）¹⁾。そして、薬を止めても精神分裂病症状などの残遺症状やフラッシュバックも出現し、治療でいったん治癒してもまた再燃するといったサイクルをくりかえすこととなります。

脳内では、大脳皮質の血流量が不可逆的に減少したり³⁾、神経細胞膜のトランスポーターという物質が影響を受けた結果、ドパミンやノルアドレナリンなどの神経伝達物質（神経細胞間の情報連絡をする物質のこと）が減少すること^{4,5)}などが確認されています。こうした神経毒によって脳内機能が異常となり、終局的には神経細胞が死滅するのです。

覚せい剤中毒の早期発見の手がかりは、落ち着きがない、怒りっぽい、闘争的、瞳孔が開いている、鼻や口の粘膜が乾いている、食欲不振、異様な口臭などです。もし周りにこのような人がいれば、専門機関に相談するなり、素早い対応をする必要がありますが、家族内では日頃のコミュニケーションが薬物乱用防止には最も大事といわれます。一人一人が自分の問題として対処していきたいものです。

文献

- 1) 福岡大学学生部編：酒・ドラッグそしてエイズ。三共出版、1998
- 2) 内閣府編：平成21年版青少年白書
- 3) 松下正明、編：薬物・アルコール関連障害。臨床精神医学講座8、中山書店、1999
- 4) U.D.Macann, et al. :Reduced striatal dopamine transporter density in abstinent methamphetamine and methcathinone users : Evidence from positron emission tomography studies with [¹¹C]WIN-35,428. J. Neurosci. 18, 8417-8422, 1998
- 5) 池田和隆、山本秀子：アルコールと麻薬と覚せい剤。生体の科学 56(1), 45-50, 2005